



あちらこちらの庭で、あじさいがしとしとと降り続く雨の中で花をつけています。よく見ると、あじさいの花は、小さな花が寄り集まって、ふくよかな一ツの花を形造っています。耳を澄ませると、仲の良い友達が沢山集まって、楽しい話に花を咲かせている、そんな声が聞こえてくるようです。あじさいの周りには、梅雨空も気にならないように思えます。

そんな六月も過ぎ、お盆の季節がやってまいりました。

檀信徒の皆様には、いかがお過ごしですか。

永遠の命

五、六年位前でしようか、宇宙ロケットに遺骨を乗せて、大気圏に散骨するというニュースが話題となりました。今、又お葬式はなるべく簡単にしてお墓も立てずに、山や海に散骨することを希望する人もふえてくるようです。

お葬式の由来と意義について、話してみたいと思います。約十五万年程前、洞窟に住み、狩りなどを行っていたネアンデルタール人（ドイツで発見されました）といわれる旧人の遺骨が発見された周囲には、その死を悼むためか、花が添えられていたそうです、これが今の所、人類最初のお葬式だと考えられています。



今まで元気な姿で言葉を交わしてきた、身近な人が息をひきとつた瞬間に、その肉体が硬直し、無表情の物体になってしまうのですか

ら、その驚きと哀惜の念が湧くのは当然なこととで、他の動物と異なり、人間だけが人の死を目前にして、ただその遺体を放置するのではなく、なんらかの儀式を営んで、その死を悼み、丁寧に葬るという習慣が古今東西を通じ広まってきた。



かつて最高裁の検事、伊藤栄樹さんは、「ひとは死ねばゴミになる」という本を書かれました。確かに科学的には、遺体は茶毘にふされると、カルシウムを水分に分解し、白骨になる事は事実かもしれませんが、ある自然科学者のお嬢さんがガンに冒されその担当の医師から死の告知を受けて、いよいよ死期が近付いた時に、娘さんに父親は、「私が亡くなったら、ゴミになるの」

と問われ、絶句してしまつたといひます。

私達はいくら自分達の肉体が物質からなるとはいえ、単なるモノとして取り扱えない所に人間らしさがあるのです。

私達がこうして元氣よく生きられるのも明日がどんな日かわかりませんが、明日への期待や希望があるからこそ、今を生きる希望が湧くのではないのでしょうか。そして、イザ死ぬ時になつて、誰からも看取られず一人淋しく旅立ち、死後誰も懐かしんでくれないとしたら、これ程わびしく、切ないことはないでしょう。

わが国では、仏教の普及と共に、人の死に際しては僧侶を招き、ねんごろにお弔いをして、その有終の美を飾ってきました。

（それはけつして、お金をかけた豪華なお葬式を意味しません）又、死後のアフターケアに万全を期し、各家ではお寺や教会に相当する仏壇に、本尊仏や故人の位牌を祀

り、死後四十九日間の中陰行事や年回忌供養や墓参りが行なわれてきました。

これらは朝に夕に身近な所で、故人の遺徳を偲び、信心やモラルを高めるのに大いに役立つてきました。

昔から、「子供は親の言うようにならないが、しているようになる」といいます。今日改めて行ずべきこと、伝えべきことは、故人や家族の絆を強めること、又私達の生活の中に、命の尊さを自然に感じとれるようにしていく事が大切です。

母の二十三回忌法要に思う

無常迅速とか

光陰矢の如しとか
かいわれていま
すが早いもので、
母の二十三回忌
を迎えることとなりました。



身を削り 人につくさん すりこぎの

その味知れる 人ぞ尊とし

私が修行に行きました永平寺様の大庫院（台所）前に吊り下がる”すりこぎ”に記されている歌ですが、どこの親ごさんも同じでしょうが、私の母は、いくら自分が苦しい状態の中にあつても、少しでも子供が幸せになるように願い、又幸せになつた事を吾が事のように喜ぶ人でした。そんな母は、私にとって、ボケがきて、床につき、死に至るまでも最大の師であり教えでありました。

痴呆の状態が進み、私の事を、

「あなたは 誰？」とたずね、

私が「あなたの息子」と言えば、「そう」と珍しいものを見るような目で私を見やつたことも、哀しいけれど、懐しい思い出です。しかしそうした姿になつた母であつても、私にとっては、世界一大切な母であり、

最も尊敬すべき対象となる人でありました。時に、ふと我に返ると「迷惑をかけるね。」

厄介になってすまないね」とも言い、手を合わせる事もありましたが、考えてみると、生れて死に至るまで、いえ死に至つてもなお、私達は人に迷惑をかけ、世話にならない時は、ひとときとしてない事に気づきます。衣・食・住、どれをとつても、一人で全て出来る事など、何一ツありません。母には、「厄介にならない人、迷惑を全くかけない人など、世界中捜しても一人としていないよ」と話したものでした。

母が床につくようになってから、私は常に、「いいんだよ、安心していて。何も心配いらぬからね。」

ただその言葉を、繰り返し言ってきました。安心して往つてもらいたい——私の願いだつたからです。

多くの方々の御縁をいただき、子供達の

見守る中、母は静かに最後の時を迎えました。

「ありがとう。お疲れさまだつたね。お袋にはいつぱい助けてもらったな。後のことは心配いらぬから安心して親爺の所に行つていいんだよ。また会おうね。」

母に対する最期の感謝の言葉と別れの言葉を伝えた、あの日から二十三年がたちました。

良寛さんの和歌に、

「思ふまじ 思ふまじとは思へども

思い出しては 袖しぼりつつ」とありますが、私達は四苦八苦の一つであります、愛別離苦の苦しみを背負つて旅する旅人なのだという感を年々深くしています。

☆ ☆

年回法事は、故人を偲ぶことです。思い出すことです。そして同時に後に残った者は、何を思い、人生に何を残していったら

よいかと考える時なのだといえましょう。

一日一日消え去っていく命であるならば、
毎日を仏の教えに順った日暮しをしていき
たいものだと、心新たにお誓い致しました。

一口伝導板

○古えの道を聞きても

唱えても

わが行ないに せすば甲斐なし

特別志納者の紹介

○為 瑞芳慈京大姉菩提供養

金 百萬円

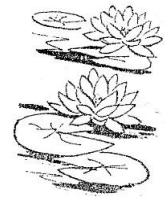
杉山 精一殿

○為 宗華良耕法尼菩提供養

金 五萬円

加藤 一郎殿

御心に添うべく、お寺の為に使わせて
いただきます。ありがとうございます。



お寺から

○開山堂及位牌堂屋根防水対策
完了の御報告

以前から雨漏れが気になってお
りました、開山堂及位牌堂の屋根の防水工
事を、護持会費の運用で、梅雨に入る前に
完了でき、ホツとしています。

お寺としての活動が活発になっていく中で、
建物自体の整備や補修等々も御寄付を仰が
ない範囲で、少しづつやつていきたいと思
っています。

今回は、檀家の山一産業様の御協力のもと、
心をこめての作業をいただき、感謝してい
ます。

○墓石、古墳石供養塔完成のお知らせ

久野地区には、古墳にかかわる石が散在
していて、何らかの形で供養しなくてはな
らないと、総世寺に入寺した際から心に掛

かっています。

このたび、山門前に総世寺や檀家さんの所にあつた、そうした石を集めて供養塔が二ツできあがりしました。

ピラミッド型に積まれた沢山の石に、「あれは何だろう？」と不思議に思つておられた方も沢山おられると思いますが、そのうち「久野古墳供養塔」と碑を造つて、明確化するつもりです。

○ざる菊の会の現況報告

去年に引き続き、今年も鈴木三郎氏の御指導、御協力を得て、ざる菊の苗を希望者にお分け出来ました。未だ手さぐり状態でのように運営していったら、より多くの方に衆知してもらえるか、展示の仕方など考えなくてはいけない事柄が山積していますが、総代はじめ御協力いただける皆様方と御相談しながら、お寺の名物行事になる

よう、ざる菊の会をしつかりしたものにしたいと思つています。

○施餓鬼会・護持会総会の開催

五月の第二土曜日（本年は十四日にあたりました）午前中に護持会の総会が開かれ、二十七年度のお寺の活動や護持会費の会計報告等がなされた後、お寺からの心尽くしの屋台がいろいろと出て、和気相々のうちにお食事をとりました。

午後は、私共の御先祖さまや御供養されないう無縁さま、数々の霊に対して御回向申し上げる施餓鬼会の法要が厳修されました。年を重ねる毎に、多くの方々に御参集いただけるようになり、嬉しく思っています。